

時流を考えてまちづくり ～有馬温泉（兵庫県神戸市）～

神戸、大阪から近く、気軽に行ける観光地・有馬温泉。1990年代には、バブル崩壊以降の不景気と阪神淡路大震災の大打撃により、一時は観光客が半減するという窮地に追い込まれた。そこへ、「団体客から個人客へ」「周遊型から滞在型へ」といった観光スタイルの変化も重なった。そんな中、有馬温泉は、いち早く旅行トレンドの変化を察知し対応することで、みごとに元気を取り戻している。“温泉革命”ともいえる変化を遂げた温泉まち・有馬の努力の軌跡をたどる。

日本最古の名湯、関西の奥座敷

六甲山の北部に位置する有馬温泉は、1300年の歴史と伝統を誇る日本の最古の温泉である。草津温泉（群馬県）、下呂温泉（岐阜県）とともに三名泉と呼ばれ、古くから関西の奥座敷として親しまれてきた。

太閤秀吉も湯治のため、たびたび有馬を訪れており、戦乱や大火で衰退した有馬の大改修を行い、湯山御殿を建てるなど、現在の有馬温泉の礎を築



有馬温泉の玄関口にある秀吉像

いたことはつとに有名である。このように、有馬温泉は京阪神の湯治場、保養地として、これまで多くの観光客を集めてきた。

ところが、バブル崩壊以降の景気の低迷や1995年の阪神淡路大震災などの影響を受けて、観光入り込み客は1991年の192万人から、1995年には102万人へと、激減したのであった。

大震災からの復興

危機感を持った旅館経営者の中から、震災復興イベントとして、日帰り温泉客に向けて温泉入浴と昼食をセットにした「ランチクーポン」を企画販売しようという案が持ち上がった。この企画に対して、同業者で

は、「対応ができない」「価格が安すぎる」などと否定的な意見が多かったが、約3分の1の旅



館がまとまり、有馬温泉にある7泉源の1つ、天神泉源同クーポンの販売が始まった。

その後、同クーポンは、手軽に日帰り温泉を楽しみたいという観光客のニーズをとらえたことから好評で、多くの観光客の利用が続いた。

それまで、旅館業界では「観光客を抱えて、まちなかに出さない」「食事も風呂もお土産物もすべて自前でそろえる」ことが旅館経営の常識とされていたが、有馬の場合は、昼食客を受け入れたことによって、旅館に宿泊客がチェックインする



有馬温泉案内図（中国語版）

前に、またはチェックアウトした後に昼食をするためにまちなかに繰り出すことになった。その結果、商店街の活性化を促し、まちなかの賑わいをとり戻すことにつながった。

その他、震災復興イベントとして、温泉の中を流れる有馬川のほとりに川床風の座敷が設けられ、芸妓さんによる踊り等を披露する「有馬納涼川座敷」も始められた。

外湯の整備

各地の温泉では、日帰り温泉や外湯めぐりが人気を集めるようになってきたこともあり、神戸市は温泉施設として2001年に「銀の湯」、2002年には「金の湯」をオープンした。通常、温泉施設には、飲食施設が併設される場所であるが、どちらの施設をみても飲食スペースは設置されていない。有馬では住民が中心となって構成する有馬町活性化委員会があり、行政が整備する施設等の企画に対して、積極的に関わりを持っている。外湯施設内については、飲食スペースをつくらずにできるだけ温泉を楽しんでもらえるスペースを広げ、よりよい施設づくりをめざしたのである。その結果、年間50万人近くが外湯を楽しむとともに、その人たちがまちの飲食店を利用するという流れができ、地域の経済活性化にもつながっている。



左上：金の湯
右上：太閤の足湯
（金の湯横）
左下：銀の湯

経営破綻した宿泊施設の再生

阪神淡路大震災以降、徐々ににぎわいを取り戻

しつつあった有馬温泉ではあるが、改修もままならない旅館も多く、経営難の旅館も珍しくなくなっていた。そんな中、まちなかの古い旅館の廃業話が持ち上がった。歴史を感じる木造旅館を壊すには忍びないということで、まちの同業者がその旅館の建物を借り受け、温泉旅館の情緒と西洋的なホテルのサービスを合わせた宿泊施設「ホテル花小宿」として



女性に人気の「ホテル花小宿」

て、1999年に再生されることになった。

同旅館再生の指揮を執ったのは、有馬の老舗旅館「御所坊」の経営者、金井啓修氏である。金井氏は、有馬のまちなみに必要となるものは何かを考え、かつて有馬にあった外国人専用のホテル風に改装を行った。ルームサービスを廃止し価格は低く抑えた。これまでの旅館では1泊2食付きが常識とされてきたが、個人客がもっと利用しやすいようにと、宿泊と食事を自由に組み合わせることができる「泊食分離」をいち早く導入。外国からのお客様にも対応が可能なようにと、和室の部屋にもベッドを入れたほか、旅館玄関や食事所には車いすで入れるよう昇降リフトを備えるなどバリアフリー化にも取り組んだ。

こうした取り組みの結果、同ホテルは非常に人気の高いホテルとして有馬の宿泊に深みと幅を広げることとなった。これを見た有馬の人たちは、古い建物を活かすことが集客につながることを理解し、さらには、有馬のまちなみを整えることの大切さを認識し始めていった。

その後、有馬温泉でそぞろ歩きを楽しんでもらうことを考え始めた仲間たちが集まり、有馬町活性化委員会に「まちなみ部会」が発足している。看板の付け方や店舗の色、素材を考えるという動きに合わせ、お好み焼き屋も町家造りに改装するなど、景観を大切に考える考えがまち全体に広がっていった。



「まちなみ景観保全・育成モデル事業推進地区」に指定された町並み
～いまでは、まち歩きも有馬の大きな魅力に～

空き店舗再生事業によるまちの活性化

一方、まちなかでも空き店舗が目立つようになっていた。1999年に金井氏が中心になって、有馬のまちの活性化を目的として「合資会社有馬八助商店」が設立された。有馬地区の不動産屋、酒造業、土産物屋、食料卸屋などの子息8人が集まって、合計300万円の資金を出し合った。

「有馬八助商店」では、空き店舗に天ぷら屋「有馬市」やラーメン屋「有馬ラーメン青龍居」を開業し、まちのにぎわいを取り戻すのに一役買って出た。

また、有馬の土産物といえば、炭酸せんべいがあるが有名であるが、名物・土産物の開発にも取り組み、明治から大正にかけて有馬で売られていた「ありま（有馬）サイダー」を復活させた。昔ながらの風味を出すため、炭酸をシャンパンの1.5倍の強さに仕上げたほか、40年以上前の古いビンを集めて、ラベルにはかつてのトレードマークだった大砲のマークを再現するなどレトロ感にもこだわった。

温泉街の土産物屋などで販売したところ、若者を中心に反響を呼び、今では有馬の風物としてしっ



空き店舗を利用した「有馬市」(右)



ありまサイダー てっぽう水

かり定着している。

歩いて楽しめるまちづくり

外湯や新しい土産物屋・飲食店ができ、泊食分離のメニューを打ち出す旅館が出てきたことなどで、有馬でまち歩きを楽しむ観光客が次第に増えてきた。しかし、谷あいのまちである有馬は、細く曲がりくねった道が多く、車社会には十分対応できていない。安全に歩いて楽しめるまちにしてい

くることが次の課題となってきた。その解決策の一つとして、有馬温泉旅館協同組合が、2001年12月から有馬のまちを周遊する「有馬ループバス」の運行を開始。運賃は1回100円。現在、1日12便の運行で月に5～7千人の利用があるという。

一方、金井氏は、御所坊関連の宿泊客や温泉街の契約店舗（約50店）の利用者を対象に、パーク&ライドを実施している。有馬まで車で来た宿泊客には町から少し離れたところにある駐車場に車を止めてもらい、そこから、ロンドンタクシーやクラシックバスで随時無料送迎を行っている。



左上：まちを走る「有馬ループバス」
左下：駐車場と温泉街の間を往復する「ロンドンタクシー」と「クラシックバス」
右下：「パーク&ライド」の案内板標識



「ものづくり人間」が集まるまちに

有馬のまち歩きの入り口にあたる場所に、有馬玩具博物館がある。ドイツの伝統的なおもちゃ、イギリスのからくり人形、1950年代のブリキのおもちゃ、鉄道模型など約4,000点のおもちゃが4つのフロアーに分かれて展示されており、これら

のおもちゃの歴史や遊び方も教えてもらえる。子供だけでなく大人も童心に帰って遊べる博物館である。

「どうして、有馬に玩具の博物館？」と思われるかも知れないが、もともと有馬は木地師が開き、木工が盛んだった所。また、有馬のある兵庫県は「からくりのルーツ」ともいわれる背景があった。からくり人形作家の西田昭夫氏とグリコのおまけで有名なおもちゃ作家の故・加藤裕三氏とが、からくりの作品展を金井氏のギャラリーで開いたのがきっかけで、有馬で玩具の博物館を作ろうということになった。ものづくりの大切さを地元の子供たちに教えることや観光客の立ち寄り施設となることを目的として2003年にオープン。建物は倒産した旅館を活用した。コンクリート造りのため、和風の情緒ある改造もできないと判断し、宿泊施設ではなく博物館として生まれ変わった。



その他に、明治21年築の土蔵の概観をそのまま活かした「ギャラリー・レティーロ・ドォロ」や、サンタクロースの楽屋裏ギャラリー「加藤裕三のおもちゃ箱」などもあり、「モノづくり人間」が集まる仕掛けもめぐらされている。

外国人誘致活動の強化

有馬温泉は国内観光客だけでなく外国人客の誘致も積極的に行っている。近年、温泉を求めてやっ

てくる外国人が増加している。有馬温泉は、国際空港からの時間距離では、箱根や湯河原よりも近いといえ、外国人にとっても訪れやすい温泉地と考えられる。そうしたことから、有馬温泉では、多言語表記の観光案内標識を設置したり、外国人おもてなしセミナーを実施するなど、外国人にも優しい観光地をめざしている。有馬温泉観光協会が発行する温泉案内マップは日本語のほか、英語・中国語・韓国語の4カ国語の対応をしているが、特に中国語版は、中国語表記と台湾語表記の2種類を発行する細かい配慮ぶりもうかがえる。



多言語表記の「案内標識」(上)と中国人向け「有馬温泉案内」(右)

常に化する観光地をめざす

「釣り糸を同じところに垂らしているだけでは、魚は釣れない」。これまで、まちづくりの中心となり、まちの活性化のため数々の企画を考え、実行してきた金井氏は言う。

観光を取り巻く環境は「団体から個人へ」「周遊型から滞在型へ」「インバウンド(外国人客)の増加」など、めまぐるしく変化している。この流れを敏感に察知して変化していかなければ、日本最古の温泉地といえども生き残っていくことは難しい。金井氏は、国土交通省が観光振興の先達と認める観光カリスマにも選定されている。常に次の一手を考える金井氏の頭の中には、次なる戦略がうごめいていた。



(井阪、丸尾) 有馬のまちでは突然の雨も大丈夫~無料の傘~